

# 教員から学生への 推薦図書

大学図書館にある本から学生のみなさんに読んでほしい一冊を紹介していただきました。  
普段あまり本を読まない学生さんも思われぬ良い本との出逢いになるかもしれません。



## 掃除で心は磨けるのか

杉原里美 著  
(筑摩書房 2019) [筑摩選書]

豊図 第2書庫2階 372.1:Su34

吉本 篤子  
国際コミュニケーション学部

学校には、なぜ?と思うような不思議な決まりがたくさんあります。髪型や制服に関する厳しい校則、無言での給食や掃除など。本書は、「子どものため」として行われている厳しい規則・強制を取材し、子どもたちに対する過剰ともいえるような身体・内面へのかかわりの現状を明らかにしています。さらに、家庭教育の力の低下などを理由に、公教育をになう学校や地域が、家庭教育への介入を進めている状況と、その政治的背景についても論じられています。学校で子どもに何を教えるべきなのか。そして、子どもにどのような成長を期待するのか。公教育の望ましいあり方について考えるためにおすすめの一冊です。



## 音楽の基礎

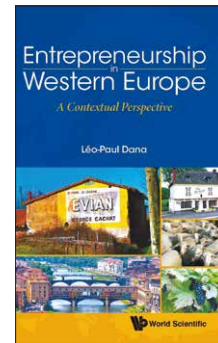
芥川也寸志 著  
(岩波書店 1971) [岩波新書]

豊図 第1書庫1階 #081.6:2:217

名図文庫 080:1952:b795

吉川 剛  
現代中国学部

音楽ってなんだと、ふと思った際に手にしたい一冊である。本書は音楽の素材・原則・形成・構成からなる音楽の入門書である。例えば「音楽の原則」第3項「音階」において、ピタゴラス音律、平均律、純正律はさらりと触れられているだけだが、関連事項を調べ、聞き比べてみると、さらに音階、調性、和声（第4章第2項に詳述）や無調音楽への興味が広がる。トピックス毎に、立ち止まり考え、気づきながら読むことを薦める。ただしゆっくりと読まないで、五線譜、音符などの例示に気がとられ、ひょっとすると読了は難しいかもしれない。音楽家である著者による「音楽の営み」について、洋の東西を問わずに繰り広げられる、含蓄のある表現を楽しんでほしい。



## Entrepreneurship in Western Europe : A Contextual Perspective

Léo-Paul Dana 著  
(World Scientific 2018)

名図研究 335.23:D35

大北 健一  
経営学部

これまで「アントレプレナーシップ」の日本語訳が起業家精神などとして紹介されてきたために、その意味する内容が起業に限定されたり、何らかの精神的なものとして浸透しているという事実是否めません。他方で、研究面では関連するトピックスは多岐にわたっており、30誌を超える国際的に評価の定まった海外の専門誌で内容確認することが可能です。しかしながら、そうした専門誌では各国・地域の長い歴史をふまえてEntrepreneurshipを学ぶ機会はなかなか得られません。本書はそうした面を補う多くの示唆に富んでいます。西ヨーロッパの歴史そのものに関心をもつ学生のみなさんにとっても新たな発見があることでしょう。なお、私が書きました本書への専門的なBook Reviewは、一流誌 *International Small Business Journal* (Sage) でご覧いただけます。



## 日本のいちばん長い日 運命の八月十五日

半藤一利 著  
(文藝春秋 1995)

名図開架 210.75 : H29

豊図開架 210.75 : H29

池亀 尚之  
法科大学院

昭和史を素材にした歴史小説で名高い著者による、ポツダム宣言の受入れを決定した1945（昭和20）年8月14日の正午から、宮城事件（降伏を阻止しようとした陸軍将校を中心としたクーデター未遂事件）を経て、ラジオ放送を通じて国民にポツダム宣言の受諾が知らされた翌15日正午までの24時間を描いたノンフィクション。2015年の同名映画の原作。75年も前の出来事であるが、規模が大きければ大きいほど、"やめることの困難さ"も大きくなるのは、今も同じであると思う。



## 平成時代

吉見俊哉 著  
(岩波書店 2019) [岩波新書]

豊橋文庫 岩波新書 210.76:Y91

名図文庫 080:1952:d1777

鄭 智允  
地域政策学部

2019年4月1日、当時の内閣官房長官である菅義偉が新元号「令和」を発表した姿は記憶に新しい。だが人々が興奮する様子を取り上げ、新しい「時代」の到来を宣言するようなマスコミの報道にはいささか現実離れを感じざるを得なかった。何が新しくなるのか、そもそも平成「時代」とは何だったのだろうか。物事を吟味することもなく、次々と新しいことが登場して我々は流されていく、政治もマスコミもそれを助長するように見える。

本書は、30年間続いた平成期における政治・経済・社会の出来事、それがどこから去来して何を意味し今後どのような影響をもたらすのかを丹念に分かりやすく語りかけている。元号を使っている国はもはや世界中日本しかない。その存在意味をもう一度考えるため、また平成時代に生まれ育った学生諸君にはぜひ手に取っていただき一冊である。



## かかる師ありき 恩師・江本茂夫傳

吉村和嘉 著  
(吉村和嘉 2008)

外部書庫 289.1:E54

大川 四郎  
法学部



※イメージは最新版です。  
本学所蔵版は無写真です。

江本茂夫（1888－1966）は旧陸軍士官学校出身の職業軍人（最終階級は中佐）である。語学将校の経歴を積み、陸士の英語教官在任中から独自の教育法を確立した。その教育法には市河三喜（英語教授研究所長）も注目した。退役後、横浜専門学校（現在の神奈川大学）主任教授として英語を教えた。第二次世界大戦勃発で現役に復帰すると、函館俘虜収容所所長に就任した。同収容所を「世界一の捕虜収容所にせんとの意気込み」から、ジュネーヴ条約を遵守し、捕虜の待遇改善に努力した。得意の英語力を駆使し、捕虜らとの意思疎通に努めた。しかし、「捕虜を厚遇し過ぎる」（陸軍省）との理由で、左遷された。敗戦直後、元俘虜収容所長が一律に戦犯裁判にかけられた中、こうした経歴により江本は即釈放となった。戦後の彼は、私塾を開き、著者を含めた多くの市民に英語を教えた。国際人道活動に関心のある皆さんに、本書の一読をお勧めしたい。



## 岩井克人 「欲望の貨幣論」を語る

岩井克人、丸山俊一他 著  
(東洋経済新報社 2020)

名図リザーブ 337.1:193

塚本 恭章  
経済学部



年始の恒例番組となったNHK「欲望の資本主義」シリーズの特別編として放送された「欲望の貨幣論2019年」の単行本化。貨幣・資本主義論、法人・信任論など幅広い独創的な研究で知られる岩井克人氏が、「おカネ＝貨幣」についてあらためて語り直した。経済学に限らず、「貨幣」は人々のくらしそのものに深く関わる存在だが、それをめぐる基本的な原理や思想を問うことは少ない。だがそこには想像以上の知的好奇心を掻き立てられる何かが潜んでいる。

本書は、古代ギリシャのアリストテレスからスミスやマルクス、20世紀のケインズやハイエク、フリードマンら経済思想史上の偉人たちの貨幣と資本主義をめぐる考えを平易に紐解きながら、21世紀のグローバル化された資本主義に内在する多面的な危機、人類社会の未来についての示唆に富む展望も熱く語られている。キーワードのひとつは「欲望」。本書をつらぬく氏の「逆説的」思考の魅力をぜひ味わってほしい。



## 変なお茶会

佐々木マキ 作・画  
(絵本館 1979)

豊図開架 726.5:Sa75

須川 妙子  
短期大学部



毎年届くお茶会への招待状。ちょっと日本語が変なのはご愛敬。世界中の仲間へ、それぞれのお国言葉で書いてくれるのだから。待ってました！とめかしこんで、えっちらおっちら、自転車、気球、ローラースケートを駆使して出かけていく。目指すは、とある国のお城の前。1年ぶりの再会を喜んで、さてさて、お茶会、森の奥へ。月が昇りその時がやってくる。ブラボー！今年の〇〇〇も最高だ！ではまた来年、ご機嫌よう。

〇〇〇の美味しさを分かち合う、それだけのために遅々出かけて行くなんて、なんとも愚かしい？ いやいや、こんな魅力的な招待状が届いたら、行くしかないでしょう。「ちょっとお茶でも飲みに来ませんか？」と、ささやかな心遣いがもたらすつぎあいの心地よさ。とっても素敵です。まあ、このお茶会の〇〇〇は、「ちょっと」「ささやか」ではないのですが…。そこがまた魅力的です。